



# 私のひとりごと

## 「昔と今」

梅雨のさなか上棟（家の骨組みを建てること）が行われた。梅雨だけに多少の雨は覚悟していたが、穏やかな曇り空で絶好の上棟日和となった。前日までには、足場の組み立てや木材の搬入も終わり、当日は総勢8名でレッカー車により組み立て作業を進めていく。午前中にはあらかじめ骨組みも出来上がり、夕方には朝に無かった家が出現するのである。そしてお施主様は決まってこう言われる。「建ってみると大きいねえ〜」と。最後に記念撮影をし、上棟日の一日は無事終了する。私の若かりし頃と比べ、なんと早く家が建つのであろうか…。時代が時代と言われればそれまでであるが、ここで私の血気盛んな頃の上棟風景をお伝えしようと思う。

まず、今の時代のように、図面をコンピューター入力し木材を加工する「プレカット」などは当然無い。すべてが手作業で、家一軒加工するのに大工さん2名で3カ月以上はゆくに掛かった。道具を持つ手は、水ぶくれが出来るほどである。また加工期間が長いので途中で中だるみしてしまい、上棟日が決定しても間に合わない事が多かった。応援の大工さんと呼び、上棟日前日などは徹夜作業となり当日を迎えるのが常である。大勢の人が集まる上棟に失敗は許されず、また大工さんの技量により家の良し悪しが決まるため、技術の習得に長い年月が必要な時代でもあった。さらに、当時は高所作業用の立派な足場も無く、レッカー（クレーン）車も無い時代。そんな時代での上棟の当日、大人が両手を回しても手が届かないような、大きな木材をどうやって持ち上げたのかというと…。



【朝と夕方で、景色が一変。びっくりしますね。】

それは、「せん棒」と呼ばれる長さ10mほどで、根の部分が15センチ、先の部分が8センチほどの丸太を、まず建てるのである。「せん棒」の先には、長さ25mほどのロープが4本と、滑車が1個ついている。そのロープを四方に分け、一本に5〜6人の人数で引っ張りあう。建て方を仕切る親方の掛け声により、「せん棒」の先を前後左右にバランス良く、木材を納める所定の場所に移動するのだ。で、肝心の木材は、「せん棒」の先に付けられた滑車に長いロープを通し、一方に木材を縛り、一方を10名ほどの人数で引き上げる仕組みである。すべて人力で、3日ほどかけようやく骨組みが出来上がる。最後に「地棟（じむね）」といわれる一番大きい木材を屋根の高いところに納め、棟上げは終了するのであるが、3日目ともなると全員が疲れ果て、重い「地棟」は1mほど上がった、50センチ下がったりの繰り返しでなかなか棟が上がらない。最後の力を振り絞り「地棟」が所定の場所に納まった時、大工棟梁は重圧から解放され安堵の微笑みを浮かべる。そして棟梁は風呂で体を清めた後、祝詞を奏上し餅まき等が行われる。その後、上棟に参加した40名ほどの人数で宴会が行われるのであった。私も棟梁として多くの家に携わってきたが、今となっては良き思い出である。

ではまた来月もお会いしましょう。

今月も最後まで読んでいただき…、

あーがしう  
ございました!!

